

『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』 におけるJ.ステュアートの小論について*

渡 辺 邦 博

目 次

1. 問題の所在——バハン伯の証言の信憑性
2. 『チャーマーズ文書』とバハン伯による「ステュアート伝」草稿
3. アンドルー・スキナーの見解
4. 残された問題

Summary: My former view that James Steuart made an article on distillery in the *Edinburgh Evening Courant* for 2nd of October 1779 should be withdrawn. David Buchan (Steuart's nephew) showed this judgement in the *Archaeologia* (1792). If we check the transcriptions in the *Chalmers papers* (in the Edinburgh University Library) with the articles in the *Courant* for 27th of September and 4th of October 1779, we can confirm that Steuart did not write it on the 2nd of October.

1. 問題の所在——バハン伯の証言の信憑性——

前稿（渡辺 [1999]）において私が紹介した、スコットランドの蒸留業をめぐる『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』（*Edinburgh Evening Courant*, 以下『クーラント』と略称する）1779年9月27日号所載の記事は、この年にイングランド議会を通過した法令に対する、スコットランド側からの反応の一端を表すものであると同時に、晩年のジェイムズ・ステュアート（James Steuart Denham, 1713-1780）の仕事を確認することにもかかわる可能性を持つものであった。⁽¹⁾

（1） 前稿に紹介した、『クーラント』1779年9月27日（月曜日）号の日付け確認については、National Library of Scotland の Sally Harrower (Ms) <Assistant Manuscripts Division> さんにご協力いただいた。記して感謝したい。

また、『クーラント』9月27日の記事巻頭のラテン語の一節，“O’MISERI, QUAE TANTA INSANIA, CIVES?” は、Vergil, *The Aeneid, Book II*, 42, (Vergil, *Eclogues Georgics Aeneid I-VI*, with an English translation by H. Rushton Fairclough, Cambridge, Mass. & London, 1916, pp. 296-297), 「やよ、哀れなる市民たちよ、狂気ばし為したるや？」（ヴェルギリウス『エネーイス』田中秀央・木村満三訳、岩波文庫上、1940年）に相当するものであろう。当時の知識人にとってのローマ古典の素養をうかがわせる。

本稿では、その後に入手した史料をも加味することによって、まず後者についての諸問題を片付けておきたい。

「混乱」の原因は、バハン伯 (Erskine, David Steuart, the eleventh Earl of Buchan, 1742-1829) が、ステュアートによる『クーラント』1779年10月2日号の記事を指摘した点にある(『スコットランド古物協会会報』 *Archaeologia Scotia; or Transaction of Society of Antiquaries of Scotland*, I, 1792, pp.137-8. 以下『古物協会会報』または、*Archaeologia* と略称する)。

この問題の解決のため、まずこの『古物協会会報』を調べることから始めたい。

『クーラント』誌それ自体において、ステュアートに直接、もしくは間接に関係を持つ記事が存在するかどうか、それが確かめられるならば、バハン伯による先ほどの記述の当否が判断できるし、これらを勘案した後で、ステュアートによって執筆されたと思われる記事が確定されることになるだろう。

1779年5月の法案議会通過以降、関連記事を拾ってみると、この年度にこのテーマを取り扱う記事としては、

- ① For the *EDINBURGH EVENING COURANT*, To the PUBLIC. Sept. 5. No. 9507, Saturday, September 11. 1779.
- ② For the *EDINBURGH EVENING COURANT*, To the GENTLEMEN FREEHOLDERS of SCOTLAND, who are soon to be assembled in their Michaelmas Meetings. September 26. NO. 9514, Monday, September 27, 1779.
- ③ For the *EDINBURGH EVENING COURANT*, QUERIES addressed to the GENTLEMEN FREEHOLDERS, of the Counties of Perth, Sterling, &c., September 28, 1779.
- ④ For the *EDINBURGH EVENING COURANT*, NO. 9517, Monday, October 4, 1779. が存在するが、バハン伯の証言に言う、10月2日付け『クーラント』には、関係記事が見出せない。

<『クーラント』が発行されている1779年10月2日は、土曜日に当たる。念のため National Library of Scotland に、10月2日号の全ページ複写を依頼したが、結論に変更の必要はない。>

『クーラント』の調査結果は、誠にあっけないものと言わなければならない。

実際の『クーラント』に該当記事がないとすれば、このバハンの証言はいかに解釈すべきなのだろうか？ それは信頼に値しないものとして、全面的に退けることもできるかも知れないが、私はその立場をとらない。ステュアートの近親者として、同時代を生きた者の証言は真実の一端を伝えるはずである。日付けは誤りであっても、それはステュアートに関するなんらかの情報を提供するものと考え、むしろそれを利用して事実接近できないものだろうか。

『古物研究協会会報』第I巻、1792年その他（1780年の『スコッツ・マガジン』の著者もバハンであろう）における「10月2日」と言うバハン伯の情報は、どのような意味を持つものなのだろうか？ もし1792年に発表されたステュアート伝の原稿に当たることができれば、この齟齬の責任がバハン伯本人にあるのか、そうでないのかが判明するだろう。

2. 『チャーマーズ文書』とバハン伯による「ステュアート伝」草稿

この問題に迫るためには、いわゆる『チャーマーズ文書』に立ち入らなければならなかった。今日では忘れ去られたかに思えるジョージ・チャーマーズ (George Chalmers, 1742-1825) は、ステュアート自身が『経済の原理』(*An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767)の第4編第2部第13章において、チャーマーズが若い頃1762年に公刊した15ページ程のパンフレットに対する匿名の批判にコメントしているだけでなく、1805年に出版された『ステュアート著作集』(*The Works, Political, Metaphysical, and Chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart*, London, 1805.)の事実上の編者であり、その最終巻に収められた「ステュアート小伝」の著者もまた彼であった。前稿でも紹介した、『クーラント』の「転写」は『チャーマーズ文書』に収められているのであって、この機会に簡単ながら、チャーマーズの収集したステュアート関係ドキュメントを鳥瞰しておくことにしたい。⁽³⁾

(2) 竹本 [1998], 訳者解説の618ページ参照。

(3) エディンバラのキャノンゲイト・チャーチには、アダム・スミスの墓所のすぐ側に、今日では忘れ去られてしまったが、ジョージ・チャーマーズの墓所もある。18世紀末から19世紀初頭にかけてには、彼が少なくない影響力を持ったと思われる。また、新版のポルグレイブ[1987]では、チャーマーズの項目が削除されているが、その旧版[1925]の叙述は多彩な彼の業績を記している。

George Chalmers, (1742-1825) Scottish antiquarian, historian, and economist, born at Fochabers in Moray, and educated there and at Aberdeen. He afterwards studied law at Edinburgh. He went to America, and practised as a lawyer at Baltimore. Returning home at the beginning of the civil difficulties in 1755, he settled in London. He was appointed, 1786, chief clerk of the committee of the privy council for trade and foreign plantations. His works were chiefly historical and antiquarian, including the well-known *Caledonia*.… Henry Higgs, C.B. [1925], vol. I, pp. 254-5.

しかしまた、Cockroft [1939] などを見ても、われわれの求める情報が、文字通り彼の公的生活に関係するものではないからか、ステュアートとの関係は見出せない。だからと言って、ステュアートとチャーマーズという、このテーマは無くなるわけではなく、今後取り組まれるべき問題であろう。現に川島信義 [1975] によってすでに一部行われている。

現在の段階での推測だが、おそらくチャーマーズとその友人たちは、1780年代の後半から、『ステュアート著作集』の編纂を開始し、その比較的早い時期に収集されたファイルの1つが、ここで問題にする『チャーマーズ文書』であろう。本来の『チャーマーズ文書』(ジョージ・チャーマーズの膨大な活動の背景となった文書全体)は、いまの所その存在の指摘すらなされていないが< Sturges [1975] を参照。>、ステュアート研究の進展によっても、あちこちに散在する関係文書が発掘されるようになると思われる。

『ステュアート著作集』の扉には、その編纂に彼の息子が関与したことが述べられているにも

『チャーメーズ文書』とは、現在ようやく研究の対象とされつつある、ジェイムズ・ステュアートの関係文書『コルトネス文書』(The Coltness Papers) などとは異なり、大体において一括して一箇所に収蔵されているものではない。その点で、われわれのステュアートは、エディンバラに一括されているものについてならば、幸運な状態にあると言えるのかもしれない。それに対して、川島論文が一部明らかにしているように、チャーメーズ関係文書は、ロンドンやエディンバラに散在しているので、ここで検討の対象とするものは、そのほんの一部分であって、とてもその全体を成すものではない。チャーメーズがなぜ『ステュアート著作集』の編纂にあたるようになったのかは、大変興味深いテーマであるが、今のところこの点は闇の中である。

バハン伯がアダム・スミスの教授を受けた学生であったことから、関係草稿はむしろグラスゴウにあるのではないかと、チャーメーズ以上に彼が忘れ去られた存在であることから、エディンバラの国立図書館で相当の時間を要するのではと見当をつけていたけれども、「心ここに在らざれば」の喩えにも言う様に、求めるものは、エディンバラ大学のスペシャル・コレクション・ルーム、「レイニング文書」の中にあった。

CHALMERIANA/LIVES OF/ALLAN RAMSAY/JAMES I OF SCOTLAND & SIR JAMES STEWART. という合本の最後に、ステュアート関係資料が存在する (La III, 515/2)。

以下簡単に、そのファイル全体の内容を示そう。

Contents of Chalmers Papers < () 内は、作業中に筆者が加えたコメントである。>

1. Memoir of Sir James Steuart Denham by Buchan, 17 pp.
with letter of A. Stenhouse to G. Chalmers, 27 Dec. 1787.
Bookplate of Steuart of Coltness Bart. (ステンハウス Alexander Stenhouse からチャーメーズ宛て書簡を含む、バハンによる「ステュアート伝」覚え書き)
2. Questions about Sir J.S.D. by Chalmers sent to Stenhouse and by him forwarded to Buchan who has added some notes. Fl. 11- (ステュアートの伝記的事実に関する、ステンハウス、チャーメーズ、バハンたちの作業過程)
3. Letters from James Duff to Chalmers 13 Feb. 1788. endorsing information about Sir

かわらず、チャーメーズが実質的にそれを仕切っていたことは、よく知られている。他方でまた、チャーメーズの多忙やステュアートの息子の職業に由来する事情などによって、『ステュアート著作集』の完成には約20年もの歳月を要している。その背景を考える場合、ステュアートの息子のステュアート将軍や、ステュアートやフランシス夫人亡き後、この編纂作業をバックアップしたであろうステュアートの甥のバハン伯が、重要な人物と見なされるだろうが、ここに紹介する一群のドキュメントから、何がしかを引き出すことも、1つの研究テーマを構成しうる。

- J.S.D. from Andrew Hay of Rannes. Fl. 16— (比較的読みやすい, ダフ発, チャーマーズ宛ての伝記的事実に関する書簡)
4. Some verses by G.C. and answers to queries by A. Stenhouse. 12 Jan. 1788. Fl. 17 (チャーマーズとステンハウスの作業の一部分, 『ステュアート著作集』のタイトル原稿を含む, チャーマーズのものと思われる, ステュアートやスミスに関する伝記的素描, おそらくはウエストミンスターの碑文と同じ内容の英語によるステュアートの碑銘)
 5. Letter from Mrs Calderwood Durham to G.C. (カルダーウッド夫人からチャーマーズ宛ての, きわめて短い書簡)
 6. Copy of a letter from Sir James Steuart of Goodtrees. 14 Oct. 1777. on the price of Corn. (シャムレーが1965年に始めて紹介したが, 実はチャーマーズによる「ステュアート小伝」(1805年)にすでに部分的に紹介されていた, いわゆる勤労者の賃金決定は, 生活費の高低ではなく, 商人の利潤によることを述べた草稿)
 7. Transcript of a letter by Sir J.S.D. in the Edinburgh Evening Courant 27 Sept. 1779. (スピリッツへの課税を論じた, 『クーラント』誌掲載の記事転写?)
 8. Answer *ibid.* 4 Oct. 1779 (『クーラント』誌1779年10月4日の記事転写, 草稿?)
 9. Transcript of a letter to Sir J.S.D. from Sir George Colebrooke, Bologna, Sept. 1780. (1779年9月付け, ステュアート発書簡形式の財政論, かなり長いポスト・スクリプト付き, 転写)
 10. Short observations on Mr Eden's account of the regime of France in his letter to the Earl of Carlyle submitted to the consultation of Sir J.S.D. by George Colebrooke. (イーデン Frederick Morton Eden のフランス財政論へのコメント, そう長くないが, 日付けなし)
 11. Transcript of letter of Sir J.S.D. to Sir George Colebrooke, Coltness, Oct. 1780 concerning item 9. (1780年10月付け, ステュアートからコールブルック宛て, かなり長い財政論)
 12. Transcript of 4 letters from Sir J.S.D. to a lady (Sir George Colebrooke's daughter, his daughter) see item 9? (ステュアートからコールブルックの娘宛て, 4通の書簡, 日付けなし)
 13. Transcript of a letter of Mrs Eliz. Mure to Mrs. Calderwood. (???)
 14. Denham about Sir J.S.D. 20 Dec. 1787. (転写, カルドウエルのミュア発, ステュアートの妹のカルダーウッド夫人宛て, ステュアートの人となりに関する書簡, 1787年12月20日の日付け, スキナーも引用しているもの)
 15. Notes by Chalmers on Sir J.S.D. (チャーマーズのメモ, きわめて読み難い)

以上のものは、日付けの確定しているものと、そうでないものに分類できる。また、これらのファイルは、一応15点からなっていると見なせる。

さらに、日付の確定しているものを分類すると、ステュアートの存命中のもの(14, Oct.1777/27, Sept.1779/4, Oct.1779/Sept.1780/Oct.1780)と、ステュアートの死後のもの(27, Dec.1787/13, Feb.1788/12, Jan.1788/20, Dec.1787)などに分けられる。(確定していないものも、当然上記のいずれかに分類できると思われる。)

他方で、書き手という点から見れば、ステュアート自身か、彼の近親者(バハン、カルダーウッド、コールブルックなど)関係のものと、チャーマーズやステンハウスのような第三者のものに分かれる。

日付けの確定しているものの中で、ステュアート死後もっとも早いと思われるものは、1787年12月27日付けの、ステンハウス発(チャーマーズ宛て)の書簡であるが、この書簡がこれらの一括ドキュメントの性質＝フランス語版『ステュアート著作集』の頓挫⁽⁴⁾の後に浮上して来た新たな企画、現在われわれが手にすることのできる『ステュアート著作集』(1805年完成)の編纂に関わる文書群の一部であることを見てとることができるかもしれない。<「ステュアート伝」の転写が、この書簡と共にあるということは、少なくともこの転写のもとになった草稿が、まさに草稿であって、印刷物からの転写ではないことに注意。>さらにまた、川島論文に言われるように、その内容がステュアートの晩年の情報に集中していることもその特徴かもしれない。また、当面の結論にも関係するが、これらの情報のうちでチャーマーズによる「ステュアート小伝」(1805)に加味されたものもある(1777年の穀物価格に関する覚え書き)けれども、結局のところ採用されなかった情報(本稿の対象である『クーラント』の記事)をも含んでいるのが分かる。

以上から、これらの文書を『ステュアート著作集』形成過程上の資料として取り扱う仕事が発生するだろうが、こうした諸点はさしあたり棚上げにして、前稿[1999]以来の考察対象である、『クーラント』の2つの記事、9月27日と10月日の記事の転写が存在することを確認し、第1番目のバハン伯による「ステュアート伝」の転写に目を移そう。

この転写とともにあるステンハウスからジョージ・チャーマーズに宛てた書簡(1787年12月27日付け)には、それが、ステンハウスが入手した、バハン伯の作成した「ステュアート伝」の草稿の写しである旨記されているから、公刊されたバハン伯筆「ステュアート伝」のもとになったものとして、先の「10月2日」説を確かめる有力な手がかりと見てよいだろう。

(4) 1784年頃のことであろう。アルベルト・ネ・堀田訳[1998]参照。なお、イタリア語から邦訳されたこの論文は、1995年のグルノーブル・ステュアート・コロックにおいて報告されたものと内容的に同じであって、1999年に出版された Ramón Tortajada (eds.), *The Economics of Sir James Steuart*, London & New York にその英語版が収録されている。また、1998年の, *Économies et Sociétés*, Sir James Steuart et l'économie politique, TOME XXXII N°11-12, NOV./Dec. にもそのフランス語版が収録されている。

この草稿を検討し入てみると、『ステュアート著作集』形成史上のいくつかの興味深い事実が明らかとなるのだが、当面の問題に関わる個所を探すと、ステンハウスによる筆写は、

“the general result of this enquiry he anonymously published in the Edinburgh Evening Courant 2 d October 1779” となっており、『古物協会会報』掲載の情報（＝ステュアートが10月2日に蒸留業論を投稿した）と異なるところがない。しかし、ステンハウスによる筆写にはさらに、この草稿と共にある先の書簡（1787年12月27日付け）の日付から数えれば5年の後になって公刊された『古物協会会報』には見あたらない次のような注記が挿入されている。

[この覚え書きの著者は、1779年9月27日に発表されたものと取り違えている]“-[the author of this memoir is mistaken for it is in the Courant for the 27 th Sept 1779]-”

つまり、この筆写を行なった者は、すでにその時点で、バハン伯による「10月2日」説の信憑性には、疑問を感じ、自らの仮説＝「9月27日」説を提示していたことになる。

この仮説の当否はすぐに判明するが、おそらく筆写を行なった者は、『クーラント』に直接当たって見た上で、10月2日にはなんら該当記事がないのも確認したのではないだろうか。

この結果として言えることは、バハン伯による「ステュアート伝」草稿と、1792年の『古物協会会報』の記述とに齟齬がない以上、少なくともバハン伯は、1792年の時点までは、「10月2日」説になんら不都合を自覚していなかったことになる。むしろ、関係ドキュメントの収集に当たったステンハウスたちの方に、データの信憑性について、ためらいがあったのではないだろうか。ともあれ、バハン伯は正しい情報を提供したが、印刷段階で例えば誤植のような形で、⁽⁵⁾それに修正が加えられた可能性は否定されなければならない。

先に1779年度の『クーラント』の検索結果を示したが、それによっても10月2日号にステュアートはおろか、関連記事は見当たらないのであるから、この問題についてのバハン伯の情報は、すべてではないが、「日付け」にかかわる限りでは、誤っている可能性が大きい、おそらくは「記憶違い」が発生していると、見なければならぬだろう。

バハン伯がなぜこうした記述をずっと修正せずにおいたかという点について、今のところ私は、⁽⁶⁾確信の持てる考えを示すことができない。しかし、次のような事情は指摘しておかなければ

(5) ここで、私の旧説[1989]、ステュアートが『クーラント』1779年10月2日号に論説を寄稿した、は、そしてスキナーの新説[1998]も、訂正されなければならない。

(6) バハン伯は、ウォルター・スコット（Sir Walter Scott, 1771-1832）の墓所となっているドライバラ・アペイを保存したりしたスコットランドの古物学者として知られているが、ステュアートの生年月日についても、2つの情報を提供していて、いまなおそれが混乱の原因となっている。詳細は、ここでは省略するが、今日スキナーによれば1713年10月10日ということになっているステュアートの生誕日についても、1712年説<『スコッツ・マガジン』>と1713年説<『古物協会会報』>のどちらもバハン伯が提供したものであって、この点でも彼に責任の一端があると考えられる。

簡潔に言えば、日付けについては単なる暦の読み違いだと考える。カトリック諸国はすでに1582年、ローマ教皇グレゴリウス13世によって現在の太陽暦に移行していたけれども、大陸における

ばならない。

少なくともバハン伯は、3度にわたってステュアート伝を作成している。すなわち、1780年のステュアートの死の直後『スコッツ・マガジン』*The Scots Magazine*, 1791年のジェイムズ・アンダースン (James Anderson, 1739-1808) の個人雑誌『蜜蜂』*The Bee*, そして1792年の『古物協会会報』であるが、そのいずれか（おそらくは、第1のものと第3のものは同工異曲であろう。両者を比較するとそうした判断も無理ではない。）を、1787年になってステンハウスが入手することになり、関連するドキュメントを収集する中で、「10月2日」ではなく、「9月27日」や「10月4日」の『クーラント』記事の存在に行き当たったのだだろう、と。チャーマーズによる「ステュアート伝」(1805年)に、なぜこうした資料が組み入れられなかったのかもまた不明であるが、「10月2日」以外の『クーラント』記事が云々されるようになるのは、チャーマーズやステンハウスによるこの段階に始まると言えるのである。

以上で、混乱の原因がバハン伯の誤記ではなく、むしろ彼の「記憶違い」である可能性が大きいことが確認できたので、次に、この点についての最新の考えであるアンドルー・スキナーの見解を整理しておきたい。

3. アンドルー・スキナーの見解

拙稿 [1999] にも示したように、スキナーはステュアートの著作リストという点では、1966年と1998年で考えを変えているけれども、今問題となっているステュアートの蒸留業論についての推論に変化はない。彼は、1779年9月30日付け、ステュアートからバハン宛ての書簡をこの問題に対する第1次資料と見なしているように思われる。⁽⁷⁾

カトリック諸国による陰陽の支持を受けたジャコバイト (Jacobite) の叛乱が、1746年4月、スコットランド北方のカロデン・ムーア Culloden Moor の戦いで終結するまで、連合王国はユリウス暦のままであったが、1752年9月2日をもって、それまでの暦法上の11日のズレを修正してグレゴリウス暦に転換した。つまり9月2日の次の日が9月14日となった。だから、1752年以前のことに属するステュアートの誕生日にも11日間のズレが発生して当然である。＜この点について、*Scots Magazine*, vol. xiv, Of the New Style, the throwing out eleventh days, a loss of leesees., Sept, 1752, 448 ページや、*Encyclopaedia Britannica*, 1768-1771, Edinburgh, の Astronomy, p. 490 を参照。＞したがって、1712年10月21日（新暦）とした『スコッツ・マガジン』(1780年)の説と、1713年10月10日（旧暦）とした『古物協会会報』(1792年)の説とは、日付けに限れば、計算が合うけれども、前者の年次が誤っていると考えるのである。ちなみに、バハン伯本人が、1791年にアルバニカス名で発表したステュアート伝では、1713年10月10日（旧暦）と、正しく年次の修正を行っているのである。『スコッツ・マガジン』は、日付けの点では正しかったけれども、年次を誤っており、それを1791年には年次まで修正しているのだから、ステュアートの誕生日は旧暦では、1713年10月10日、新暦では1713年10月21日となると判断するのが、私の考えである。丸山 [1984] をも参照。

(7) See, Skinner [1966], p. lv & [1998], p. lxii.

スキナーのこの問題に関する詳細は、上記に示した短い箇所でしかうかがわれないので充分には明らかでないが、彼は先行する諸研究を踏まえているはずだから、およそ次のように考えているのではないだろうか。

ステュアートの蒸留業論の存在について彼は、「モルト・スピリッツに対して、イングランド並課税を行なうとする法令に端を発する不満に示唆を受けた」と言うバハン伯による『古物協会会報』以来の情報を採用するが、記事の日付けについては、チャーマーズやステンハウスの逡巡を知ってか知らずか不明だが、現物の『クーラント』の10月4日の記事に、9月27日の『クーラント』の記事に触発された旨の記述があるという点をおそらく根拠にして、「10月4日」の記事をステュアートのものと推定した。さらに追加的史料としてスキナーが提示した、1779年9月30日付け書簡<30 Sep.1779 in the National Library, MS.936> (ステュアートからバハン宛ての書簡の転写) では、ステュアートが証明したこととして、ビール消費税の軽減と麦芽税の引き上げによれば、従来の消費税総額に相当する税の徴収が可能であること、現行法の撤廃要求運動は効を奏しないと判断すること、などが述べられているから、ステュアートが、9月27日の記事に接して以降、9月30日にバハン宛ての書簡を作成する前に、蒸留業論を起草し、それは、9月28日から10月3日位までのうちに『クーラント』誌編集者に送られ<9月27日<月曜日>の記事を読んだ者が、『クーラント』の10月4日<月曜日>に記事を掲載できるのは、9月29日(水曜日)、10月2日(土曜日)、そして一週間後の10月4日ということになる>、明らかに9月27日の記事を明示した10月4日付の蒸留業論という形で、公刊されたのだ、という判断を行なっているように思われる。スキナーは、言わば9月27日と10月4日とを繋ぐ同時代の第1次資料を提示し、バハン伯の10月2日説に替えて、ステュアートには蒸留業に関する小論が1779年10月4日に作成されたと言う説を、はじめて明示的に打ち出して、この問題に一応の決着を与えたと言える。

ここで、この問題について私は、新資料を提示したい。1779年から約1年後の1780年10月18日と言え、ステュアートの没するわずか1月前であるが、この日付でステュアートからバハン伯に宛て(リンハウス発)の1通の書簡が存在する。その1節に曰く、「蒸留業について貴方様にいっそう立ち入った考えをお送りできずに申し訳ございません。私は、M.デムスターにせよ他の誰にせよ、この問題についてどんな覚え書きも作成してはいません。私が彼に対してこの問題に関する手紙を書いたのは事実ですけれども、手紙の複写を手元に残してはいません。」

(Letter to (the Earl of Buchan), Linhouse Oct, 18, 1780.La.II.588, Trustees of the Edinburgh University Library.) <I am sorry not to be able to send your Lordship any farther light concerning the distillery.I never composed any memorial on the subject either to M.Dempster or any body else.I wrote to him indeed on the subject but kept no copy of my letters.⁽⁸⁾>

この手紙によれば、ステュアートがこの日付以前に、蒸留業についてなんらかの論説を作成したことがある、ことをさらに強く推測させるのであって、ステュアートによる蒸留業論の存在を側面から補完することにもなると考えてもいいのかもしれない。

4. 残された諸問題

それでは、以上でこの問題はすべて片付いたのだろうか？ そもそもその出発となった、日付に誤認のあったバハン伯の証言は、どう評価すべきだのだろうか？

ステンハウスやチャーマーズたちによる、『クーラント』の記事の転写は、むだな作業に終わっただけで、現在から見れば何の意味も見出せないのだろうか？

バハン伯の「記憶違い」については、彼が数字にルーズであったのかもしれないこと以外に、次のような推測をしておこう。スミスやリカードなどには、かなり長い研究史を前提にてすでにいわゆる *The Works and Correspondence* が存在するが、残念なことにステュアートの場合にはそれに恵まれていない。だから、この蒸留業論についても、もしかするとまだ発見されてはおらず、もちろん永久に発見されないかもしれないが、問題の「10月2日」にかなり近い時期に、ステュアートとバハン伯との間に交わされた書簡類があつて、そこにこの間の事情が物語られているのかもしれない。バハン伯は、その記憶によって、10月2日説に固執したのかもしれないのである。

また、チャーマーズ文書にある、9月27日と10月4日の2つの『クーラント』からの転写をどう考えればよいのだろうか。さしあたりの結論は、ステュアートが蒸留業論を、9月27日掲載の法案へ反対論にコメントを加える形で作成したという前提に立てば、27日の記事の筆者はステュアートではなく、『チャーマーズ文書』にある転写物は、コピーのない当時ではありふれた複写方法であったまさしく転写であり、10月4日の記事の筆者がステュアートではないか、ということになる。この点で、ステュアート関係文書の先駆的研究者ポール・シャムレーの見解＝ステュアートが9月27日に『クーラント』に投稿した、は撤回されなくてはならない。

また、27日の記事の転写には、実際の新聞と比較してほとんど誤写がないのに対し、10月4日のものは少なからずそれが含まれる。だから、10月4日の記事については、いまだし結論を出すのを待った方がいいのかもしれない。

最後に、ステンハウスやチャーマーズがなぜ、『クーラント』関係の記事を、ステュアートの著作リストに組み入れることは別にしても、『ステュアート著作集』に付された「小伝」にも採

(8) ステュアート関係資料の収集について、エディンバラ大学スペシャル・コレクション・ルームの Jean Archibald さんに感謝しなければならない。1993年以来探索資料の閲覧に便宜をはかっていただいたばかりでなく、E-mail で書簡の解読にも協力していただいた。エディンバラ大学の図書館も「合理化」の流れにあって、当時と比べて有能なライブラリアンの数は半減してしまった。

用しなかったのか、という疑問が生ずる。現時点での私の考えは、9月27日はもちろん、10月2日の新聞や10月4日の新聞を探索した彼らには、はっきりステュアートであると言う確信がつかめなかったのではなかったかと、考えるのである。

以上で、この論文冒頭に提示した問題についての考察は終了した。

この過程で収集した関係ドキュメントを使用して、ステュアートの蒸留業論を考察するのが、次の課題である。

- * 本稿の一部を関西学院大学において開催されている、経済学史研究会（1999年12月18日）において報告させていただき、当日ご出席の先生方から有益なコメントを頂戴した。記して感謝したい。

<参考文献>

- マヌエラ・アルベルト・ネ／堀田誠三訳 [1998], 18世紀フランスにおけるサー・ジェイムズ・ステュアート受容の困難, 『一橋大学社会科学古典資料センター年報』, no.18, March.
Archaeologia Scotia [1792]; or *Transaction of Society of Antiquaries of Scotland*, I, pp.137-8.
Chamley, P. [1965], *Documents relatief a Sir James Steuart*, Paris.
Cockroft, Grace Amelia [1939], *The Public life of George Chalmers*, *Studies in History, Economics and Public Law*, edited by the faculty of political science of Columbia University, number 454, New York.
Encyclopaedia Britannica [1771]; or, *A Dictionary of Arts and Sciences, completed upon a new plan. In which the different sciences and arts are digested into distinct treatises or systems; and the various technical terms, &c. are explained as they occur in the order of the alphabet. Illustrated with one hundred and sixty copperplates.* by a Society of gentlemen in Scotland. in three volumes, Edinburgh.
Higgs, H. [1925], *Palgrave's Dictionary of Political Economy*, edited by Henry Higgs, C.B., London.
川島信義 [1975], J.ステュアート全集の発刊とジョージ・チャーマーズ, 西南学院大学『経済学論集』10-1。
丸山広一 [1984], サー・ジェイムズ・ステュアートの生誕年について, 福島大学『商学論集』53-3, 福島大学経済学会。
Skinner A.S. [1966], *Sir James Steuart An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, Edinburgh & London.
Skinner, A.S. [1998], *Sir James Steuart An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy* edited by Andrew Skinner: contributing editors, Noboru Kobayashi and Hiroshi Mizuta, London.
Sturges, R.P. [1975], *Economist's Papers, 1750-1950*, London & Basingstoke.
竹本 洋 [1998], ステュアート『経済の原理—第1・第2編—』訳者解説, 名古屋大学出版会。
渡辺邦博 [1989], G.チャーマーズまでのJ.ステュアート—著作情報を中心として—, 福島大学『商学論集』58-4, 福島大学経済学会。
渡辺邦博 [1999], 1779年のスコットランド蒸留業問題をめぐる若干の新聞記事について—晩年のジェイムズ・ステュアートと内国消費税問題—, 『産業と経済』14-2, 奈良産業大学経済経営学会。